

久留米大学

比較文化研究所年報

第1号

2007

比較文化研究所年報 第1号 (2007年度)

目 次

発刊にあたって	1
研究所の概要	2
比較文化研究所20周年記念講演	5
「筑紫平野の物部氏と邪馬台国ー大きな壺は大きな平野に生まれるー」 谷川 健一	
活動報告	
1. 研究部会報告	
1) 欧州研究部会	18
2) 外国語教育研究部会	19
3) 健康文化研究部会	19
4) 地域博物館研究部会	20
5) 福祉コミュニティ研究部会	22
6) 文化財保存科学研究部会	23
7) 民事法研究部会	25
2. 筑後川流域圏の総合研究 (大川研究)	26
3. 社会連携研究「健康・生きがいのあるまちづくり」	29
4. 研究員発表会	31
5. 日誌 (運営会議、研究所会議等)	33
施設・設備	34



発刊にあたって

比較文化研究所長 浅見良露

比較文化研究所は、1987年に設立以来、2007年に20周年を迎えました。

最初、大学院比較文化研究科の研究機能を受け持ち、所員もまた、専任所員および大学院比較文化研究科後期博士課程教員に限られていましたが、2001年における組織変更によって、比較文化研究所所員も、大学院担当教員を中心に、その他の希望する専任教員にまでその枠が広がられました。

そして近年、大学での研究成果の地域や社会への還元が求められる中、比較文化研究所は、2006年度に「筑後川流域圏の総合的研究」を、2007年度に、文部科学省私学振興高度化事業である社会連携研究「筑後川流域圏における産学官民協働と地域コミュニティ開発に関する研究～健康と生きがいのあるまちづくりを中心に～」をスタートさせました。いずれの研究事業も、比較文化研究所の研究成果の地域への還元、さらには、久留米大学と地域との連携強化を図るものであります。

本年報は、その背景の下、比較文化研究所の活動を、広く地域や社会の方々に知っていただくべく発行するものであります。

本年報の発刊を機に、比較文化研究所と地域や社会との交流・連携がさらに広がることを期待します。

2009年 3 月

研究所の概要

比較文化研究所は、1987年に久留米大学付属の研究所として創設された。

研究所の目的は、「新しい学際的統合を基本理念として、文化の構造と機能に焦点を当てた総合的比較文化研究を行うこと」（比較文化研究所規程）であり、学問領域を超えて学際的な研究の推進を図ることを目指すものである。

設立当初は、文系学際大学院「比較文化研究科」を設置するための母体として、大学直属の研究所を設け、専任所員及び大学院博士課程比較文化研究科後期課程の教員によって組織しており、研究所長もまた、比較文化研究科委員長（当時）が兼任していた。

その後2001年において、研究所の組織が次のように改正され、平成19年現在においては、次のような組織・体制となっている。

構 成

所 長 堂前 亮平（文学部教授と兼任）

専任所員 森 醇一朗（教授）

行實 鉄平（講師）

客員教授 鈴木 廣

所 員 73名（専任所員2名（上記）、大学院比較文化研究科後期博士課程の教員29名、大学院心理学研究科後期博士課程の教員6名、任意に加入する助教以上の教員36名）

特別研究員 1名

研 究 員 30名

専任所員は、講師以上の教員となり、任期制をとっている。

所員は、専任所員、大学院比較文化研究科後期博士課程の教員のほか、大学院心理学研究科後期博士課程の教員および任意に加入する助教以上の教員により構成されている。

研究体制としては、「研究部会」を置き、各研究部会長が研究活動の中心として研究活動をリードしている。平成19年度における研究部会は以下の通りである。また、各研究部会の研究活動を次項以下に示す。

- 1) 欧州研究部会（部会長 児玉 昌己 教授）
- 2) 外国語教育研究部会（部会長 李 偉 講師）
- 3) 健康文化研究部会（部会長 吉水 浩 教授）
- 4) 地域博物館研究部会（部会長 森 醇一朗 教授）
- 5) 福祉コミュニティ研究部会（部会長 保坂 恵美子 教授）
- 6) 文化財保存科学研究部会（部会長 狩野 啓子 教授）

7) 民事法研究部会 (部会長 東 孝行 教授)

さらに、2006年度より、研究成果の地元地域への還元を意図して、地元である筑後川流域圏を対象地域としたプロジェクト研究「筑後川流域圏の総合研究」を行っている。2006年度～2007年度においては、大川地域における研究が行われた。

また、文部科学省が進めている私立大学学術研究高度化推進事業のなかで社会連携研究推進事業に、比較文化研究所は大型研究プロジェクト「筑後川流域圏における産学官民協働と地域コミュニティ開発に関する研究—健康生きがいのあるまちづくりを中心に—」(代表保坂恵美子、研究分担者15名、研究期間5年間)の申請が認められ、2007年度からスタートしている。

研究員制度は、後期博士課程を修了した者が、その後も研究を続け、博士の学位論文の作成を目指すというものである。平成19年度は、30名の研究員が在籍しており、指導教員の指導の下、各自の専門分野の研究を行っている。

組 織

比較文化研究所における議決組織として、主として次の2つの議決組織がある。

運営会議：所長、専任所員、研究部会長、所員の代表からなる組織で、2007年度は合わせて16名の運営委員で構成されており、研究所の運営に関する中心的な議決機関となる。

研究所会議：所長、専任所員、所員全員からなる組織で、規程、運営方針、予算、人事等に関する決定を行う。

また、学部などとの必要な連絡調整を図り、研究所の円滑な運営を期するため、研究所協議会が置かれている。協議会は、所長、学部長、専任所員の教授を含む所員の教授5名によって組織されている。

主な活動

比較文化研究所の活動は、研究部会の活動および研究所の活動に分かれる。

本年度の活動については次項以下のとおりである。

比較文化研究所創設20周年記念講演会の開催

2007年度においては、比較文化研究所の創設20周年を記念して、谷川健一氏(民俗学者、日本地名研究所長、2007年度文化功労者)を招聘して、2007年12月9日(日)に御井キャンパス500号館で講演会を開催した。講演題目は「筑紫平野の物部氏と邪馬台国」であり、約250名の聴衆を魅了しました。講演内容は、本年報を参照されたい。

研究成果の公表

研究所の紀要として『比較文化研究所紀要』第1輯を1987年に発行したが、その後1993年発行の第14輯からは『比較文化研究』と紀要名を改称し、2007年度においては第40輯および第41輯を刊行した。第40輯および第41輯の目次は以下の通りである。

『比較文化研究』第40輯（2008年2月発行）

大矢野 栄次「貧富格差の原因と対策」 pp.1-22

張 国興「東アジアの貿易・投資・安保関連日誌－2007年1月～6月」 pp.23-85

行實 鉄平「大川市のスポーツ振興」 pp.87-113

『比較文化研究』第41輯（2008年3月発行）

岩田 好司「ホリスティックな外国語教育」 pp.1-26

森 醇一郎「九州における徐福研究の成立過程－内藤大典のはたした役割－」 pp.27-39

大矢野 栄次「風浪宮と三柱神社」 pp.41-58

各研究部会等の研究成果の公表

また、各研究部会などにおいても出版物をはじめとする研究成果の発表が行われているが、それらの成果については、各研究部会等の報告（後述）を参照されたい。

さらに、研究員については、平成18年度から、年度末の2月に、研究員研究発表会を行い、その年度における研究成果の発表が行われている。

比較文化研究所20周年記念講演

筑紫平野の物部氏と邪馬台国 ―大きな壺は大きな平野に生まれる―

日本地名研究所 所長 谷 川 健 一

平成20年12月9日(日)、比較文化研究所20周年記念講演として、2007年度文化功労者である谷川健一先生にご講演をいただいた。会場となった本学500号館51A教室には、250名を超える参加者が集まった。



今日のテーマは「筑紫平野の物部氏と邪馬台国」ですが、これは時代から申しますと、日本の弥生時代にあたる話でございます。弥生時代というのは、今は先史時代という形で、ひっくり返して申していますが、しかし吉野ヶ里のような大きな遺跡が出て参りますと、遠い先史時代の話として一括して受け止める訳にはいかない、ということになる。

日本の国を考えますと、日本は、東アジアの周縁に位置しております。ユーラシア大陸の一番東の端になる訳です。そうしますと、東アジアの文明、東アジアだけでなくアジアの文明といいますのは、東へ移りますとどうしても日本が最後になる訳です。日本はインド、中国などの高度のアジア文明の吹き溜まりのようなところにあります。そうした訳でアジアの文明遺産というのは大部分日本に集ってしまう。

しかし、日本はインドとか中国に比べますと、非常に文明の差が大きいものですから、どうしても政治の立場から申しますとアジアの周辺部分なんです。日本の先史時代以来の歴史を考えますと、日本の歴史の運命を決定するのは日本じゃない。すべて日本は外圧、外側からの刺激によって動いて来ている。これは非常に残念な話ですが、事実だから仕方がない。

例えば、明治維新を考えましても、百姓一揆によって明治維新が起きたという説もございますけど、やはり決定的なのは黒船です。アメリカの船が日本にやって来て開港を迫ったというのが維新のきっかけです。外圧です。外側からの刺激、強制的な刺激、つまり外側からの圧迫によって日本は社会体制を変えていく。これは明治維新だけでなく、今度の敗戦、終戦これを考えてもおわかりのように、

これは日本が負けて、アメリカをはじめとする諸外国の圧迫によって戦後がもたらされているわけです。そういうふうにして、絶えず外側からの圧迫刺激によって日本の社会体制というのは決定的な変化をする。これが日本国の運命なんです。

これから先どうなるかわかりませんが、少なくとも今まではそういうふうでした。それが弥生時代においてもそうなんです。弥生時代には中国には漢という国があって、それから時代を経て魏の国が生まれる。南の方には呉の国が生まれる。それが日本に大きな影響をおよぼすことになった。

邪馬台国が日本に生まれた時には、日本は勿論文字がないわけですから、中国の史書によって邪馬台国の実情を知ること以外にないわけです。『魏志倭人伝』という本の中にいろいろ書いてありますが、魏国によって日本国というのは運命を決せられている。中国は朝鮮半島に楽浪郡という国を漢の時代から作りましたが、やがて南の方に帯方郡を作る。楽浪郡は今の北朝鮮の平壤あたりが楽浪郡です。また今のソウルあたりが帯方郡になりますが、そういう郡を作った。

その楽浪郡と帯方郡が朝鮮半島のみならず日本列島を支配しているわけです。魏国の使者が福岡県の糸島半島の伊都国に常駐していて日本を監視している。それによって日本は大国のご機嫌をとりながらいるという状況で、日本列島の弥生時代の運命は朝鮮半島の楽浪、帯方の行動によって支配されている。それをさらに魏国の都である洛陽を中心とした勢力によってたえず監視されているという事実があるのです。

日本の邪馬台国のことを論じますのに、考古学の立場を取っている方には考古学のことしか頭にない、考古学は遺跡遺物を研究する学問ですから、遺跡遺物だけが頭にある。それで邪馬台国は九州にあるか、或いは近畿地方にあるかと論じている。

どうも考古学的には近畿地方が、話が合うということで、近畿説を取り上げる人がかなり多い訳ですが、しかし、今云いましたように遺跡、遺物だけで判断することは出来ない。ということはお分かりだと思うのです。

やはり、東アジアの情勢ということから日本国の運命を割り出して行かねばならない。それは悲しいかな今も昔もそうなんです。明治維新もしかり、敗戦後の日本もしかり、遠く遡れば天智天皇の時に、白村江で負けた日本国、敗北した日本の行動もやはり体外的な対抗措置を考えなくては済まないわけでした、九州各地に山城を築いて朝鮮半島からの攻撃を防禦した。

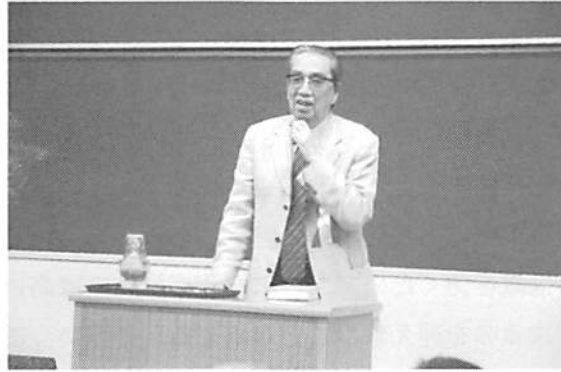
高良山の神籠石というのがどういうものか、はっきりしたことは云えませんが、高良山の神籠石もかなり遠く朝鮮半島、あるいは中国との関係を頭の中に入れなければ、その存在はなかなか理解出来ないと思います。

日本の運命を決するのは日本だけじゃない。日本自身じゃない。対外的な大きな視野の中で日本の運命を理解してゆかねばならない、ということを先ずもって申し上げます。

中国、それから中国の植民地であった朝鮮半島の楽浪、その南の帯方という二つの郡が日本を支配しているのでありますが、そこに変動が起こる。中国内部が安定した時代を過ぎまして、国内事情で安定を欠くような事態がおこりますと、朝鮮半島に影響して来るわけです。

それで朝鮮半島に影響することは、中国の朝鮮半島に対する支配力が弱まる。中国の国内事情のために、対外的な締め付けが弱まるという事態となる。楽浪、帯方郡の力が弱まって来る。そうすると、朝鮮半島の中で混乱が起こって来る。そのうちに朝鮮半島の国々が自主的な活動をはじめて来る。そ

いうことを『後漢書倭伝』（『後漢書』東夷伝倭人条）とか『魏志倭人伝』に書いてあるのです。



実は私の想像で云っているのではなく、ちゃんと書いてあります。ちょっと読み上げてみます。『後漢書倭伝』には「桓・靈の間、倭国大いに乱れ、更に相攻伐すること暦年にして主無し」。桓というのは漢の桓帝のことです。靈は漢の靈帝のことで、時代から申しますと、靈帝の場合は一七八年から一八三年ですから、二世紀の後半です。二世紀の後半に倭国が大変乱れた。その乱れた有様をどういふに書いてあるかと申しますと、『魏志韓伝』に韓の国のことを書いてある。韓は朝鮮半島の辰韓、馬韓、弁韓で朝鮮半島の国々のことです。

魏志に朝鮮半島のことを書いた『魏志韓伝』には「桓靈の末、韓滅は彊く盛ん、郡県は制するにあたわず、民は多く流いて韓国に入る」とある。桓靈というのは漢の桓帝、靈帝です。

韓滅は、韓は朝鮮半島の国、滅は韓の北方にある国です。郡県というのは朝鮮半島の楽浪、帯方郡のことをいうのです。楽浪、帯方の支配力が弱まって制御できなくなり、韓滅が非常に強くなって、それを止めることが出来なかったというのです。それで朝鮮半島が流動的になって楽浪、帯方郡の人民はさすらって、韓国に流入した。韓国というのは馬韓、辰韓、弁韓のことを申します。朝鮮半島の南の方に流出する人民が増えたということです。

先ほど申しました『魏志韓伝』には「桓靈の間に郡県制するにあたわず」とありますが、『後漢書倭伝』には「桓靈の間倭国大いに乱る」更に「相攻伐すること暦年にして主無し」、要するに桓靈の間に倭国が乱れたということは、朝鮮半島の楽浪、帯方の軍権が制御できなくなった、取り締まることが出来なくなったから郡県の人々はみんな韓国に流出したのであるが、それを受けて倭国大いに乱れる。

だから朝鮮半島が乱れると、それが日本の国に波及する。倭国が大いに乱れたからと言って、それは倭国だけの問題でないと、朝鮮半島の影響で倭国が乱れたということで、朝鮮半島が乱れたということは、中国の国内に非常に不穏な状況が、醸し出されたからその影響で、中国の植民地の楽浪、帯方が制御出来なくなったという結果になっている訳です。だから一番最初に申し上げましたように、日本の運命を決するものは、日本だけではない。それは遠く震源地、中国にある。それが朝鮮半島に波及する。そういう段階を通して日本の国内状況が醸し出されるのです。

朝鮮半島の影響で二世紀の後半、弥生時代に倭国大いに乱れるという危機がやって来るわけです。そこで日本列島はどのような政治的な変動になったかと、これは私がこれから皆さんに申し上げたいことですが、九州が一番にその影響を受ける。九州が朝鮮半島に一番近いですから、影響はまず九州に来るわけです。

九州の国々が今までのような安定性を欠いて動き出す。そしてその一部が東へ移ったと私は考えます。

弥生時代の中期、九州の国が東へ移ったというのは何を意味するか、具体的に云えば物部氏が東へ移ったと私は考えるのです。筑紫平野が物部氏の本拠であったと思う。

筑紫平野というのは、福岡、佐賀両県に亘りますけど、大体久留米が中心だと思う。この久留米を中心としていた物部氏の勢力が倭国の大乱によって東へ移動する。倭国の大乱の時高い所に集落が沢山出来るのです。九州から瀬戸内海に高地性集落と言って何百^{ドル}も高いところ出来る。何で高所に集落があるかという、それは敵を防ぐためです。敵を防ぎ易いのは高い所ですから、見通しが利きますね、山裾から敵が上って来るのを迎え撃つことが出来る。そういうことで防御的な集落がその時に限って出来るということは、戦乱の時代を迎えたということで、戦乱の時代を迎えたときに筑紫平野にいた物部氏が東へ移った。という話を最初に申し上げたい訳でございます。

物部氏と云うのは、もののふ、という言葉の源流だと思う。もののべ、もののふ、それは軍事的な種族でもあるのです。奈良朝の初めあたりは物部氏が警察力を握っている。それからもう一つは高貴な人達が亡くなった魂を鎮める儀礼をするのが物部氏ですが、もう一つこれから申しますが、物部氏に付随するのは金属を制作する氏族の上であってその氏族を支配し管理する。この三つの特性が物部氏に備わっていたと私は思う訳であります。金属精錬の集団を支配するということは、東へ移った物部氏の場合も関係があります。

結論から申しますと、物部氏は東のほうに移って、河内から大和の方に入って行って、その河内、大和を中心とした畿内に物部氏の王国を作った。

物部氏の王国のシンボルが銅鐸だったと思うのです。そういうことで金属の制作をする工人達を支配するのも物部氏であった。と考える訳であります。

筑紫平野の物部氏が、久留米あたりを中心にしていたということになると、あまりにも話が出来すぎではないか、久留米市に来て久留米を強調するのはあまりにも調子が良すぎるのではないかと皆さんは思われるかも知れませんが、これは全くちがいます。すでに三十年前に『白鳥伝説』を書きまして、このことを書いているのですから、今日に合せて話をするものでないことはあらかじめご承知ください。今日を当て込んで話しているのではございません。

物部氏の先祖にニギハヤヒという神様が居りまして、この神様は『日本書紀』に出てくるのです。神武天皇のところに出てきます。神武天皇は九州に居る。その神武天皇が云うには、自分より早く中央に行った者が居て天から飛び降りたという。それはニギハヤヒであろうと言っている。それが『日本書紀』に書いてある。ですから自分より早く中央まで行ったのはニギハヤヒであると神武天皇が述懐しているのです。それがニギハヤヒなんです。

ニギハヤヒというのは、『日本書紀』にちゃんと書いてある。神武天皇より先に中央に行った。ニギハヤヒは物部氏の祖神です。

物部氏の祖先の神ニギハヤヒが中央に行ったと言うことは『日本書紀』にも書いてあります。物部氏の先祖のことを詳しく書いた『先代旧事本紀』という本が、平安時代の初期に出来ました。『旧事本紀』の中にこういうことが書いてある。

空から飛び降りたと『日本書紀』に書いてありますが、『旧事本紀』によりますと、ニギハヤヒが沢

山の部下を連れて、天磐船というのに乗って空から降りたと書いてある。

天磐船の磐は堅いという意味で、天磐楠船がもともとで、楠で造った船は非常に堅牢だといわれ天磐楠船が天磐船になっている。

空から地上に降りてきたと書いてありますが、船に乗って空から降りて来るということは実際には考えにくいことですからやはり、どこか海から船に乗って何処かに上陸したと考えるのが妥当だと思います。

祖神のニギハヤヒを奉斎した物部氏は何処から来たかということ、先ほど申しましたように、九州の筑紫平野から行ったと私は思う訳ですが、それはどんな風に行ったか。

私は阿蘇の東の大分県の直入郡あたりから瀬戸内海に抜けたと考えます。四国の愛媛県の北部、それから香川県の北部、つまり伊予、讃岐の沖を通して瀬戸内を航行して東に行って河内の平野に行き、河内平野に大和川というのが流れていますが、そこを遡航して一番最後に生駒山脈の西側の^{くさか}日下にたどり着いたのではないかと考えます。

それでももう少し九州における物部氏の話を申し上げたいと思います。

ニギハヤヒが部下を沢山引き連れて、東へ移った時の氏族の名前が『旧事本紀』に出ております。読んでみますと「^{いつともひと}五部人を副へ、^そ従となして^{つかへまつ}天降り供奉らしむ」五部人の部というのは部族です。五つの部族を従えたとなっています。一番^{もののべみやつこのおや}物部造祖の天津麻良、^{あまつまら}笠縫部等祖の^{かさぬひ}天曾蘇、^{あまつそ}為奈部等祖、^い十市部首等祖、^な筑紫弦田物部等祖、^{べらのおや}筑紫の弦田というのは筑前の鞍手郡、^{あま}苅田郡の弦田です。この五つの部造を連れて行くのですが、更に二十五人の種族を連れて行くわけですから、その二十五人の名前が出ています。

二田物部、これは筑前の鞍手郡の二田郷、筑後の竹野郡の二田郷、ここからも連れて行ったんです。

当麻物部、これは肥後の益城郡の^{たま}当麻郷。

苅田物部、馬見物部は筑前の嘉穂郡の馬見郷、嶋戸物部は筑前の遠賀郡の嶋門、それから疋田物部があります。これは九州ではない。それから赤間物部、筑前の宗像郡に赤間と言う所があります。山口県の赤間、それから久米物部、これは九州の球磨郡に久米郷というのがございます。

それから大豆物部、これは大豆と書いて、まめ、肥前の三根郡に豆津郷というのがある。筑紫聞物部、これは豊前の企救郷、筑紫贄田物部、筑前の鞍手郡の新分郷というように、二十五の物部の中で大半の地名が九州にあるのです。地名ですから、こういう部族の地名が残っている。この地名を冠した、例えば筑紫贄田物部とか赤間物部とか、あるいは二田物部とか、物部の名前の付いた筑前、筑後、豊前などの同族を連れてニギハヤヒが船に乗って大和の方に行ったと書いてあるのです。ですから非常に地名が重要です。

そしてまた、その名前は単に九州だけではなくて、畿内にも同じような名前がある。これは面白い、例えば二田物部を申しますと、筑前の鞍手郡あるいは筑後の竹野郡にあると同時に和泉国の和泉郡に二田村というのがある。当麻物部というと肥後国の益城郡の当麻郷でございますが、大和国の葛下郡に当麻郷がある。当麻寺というのもあるでしょう。

同じような名前が九州にあって、畿内にもある。それから馬見物部、大和の北葛城郡に馬見村がありますが、筑前国の嘉穂郡の馬見郷、筑前にもあるのです。馬見物部は近畿地方にもあって九州筑前にもある。九州にあった同族の名前が近畿地方にもあるということになります。

この問題をどういうふうにかえたら良いかというふうになるのですが、例えば、大豆物部、これは久留米の近くに豆津というのがありますね。九州にある地名が大和にある。これは何を意味するか、九州からそういう物部をニギハヤヒが連れて、関西に移動したという証拠ではありませんか。でなければ二つの所に同じような地名が付くはずないのです。ただ一つだけでなく二十五の氏族の大半がそうなんです。

北九州にある地名が大和、河内にある。これを考えますと、物部氏は筑前筑後から自分の同族をつれて、河内大和に移ったということがわかります。地名がいかに重要であるかは、皆さんご理解頂けると思うのです。

九州と畿内に二つの地名があるおかげで、部族の移動というのがはっきり出て来ます。そういう訳で物部氏が、九州から近畿の方に移動したのじゃないか、その時代は倭国の大乱の時代、倭国大いに乱れるという時代であり、九州の政治地図が変動致しまして、物部が九州から東へ移動した。

なぜ九州から東へ移動したのか。ということになりますが、九州が雨になると次第に関西や関東の方も雨になるというふうに、天気も西から東へ移りますが、おそらく朝鮮半島に一番近い九州が不安定になったので、それじゃ安定した内陸の方へ移動しようと思って物部氏は東の方に移動したのではないかと、考える訳でございます。



倭国の大乱の後に、卑弥呼が登場します。『魏志倭人伝』に出て来る邪馬台国が何処にあったか、という問題があります。これには色んな説がありますが、九州説と近畿説の二つに大別されます。それ以外にもどこの県にも邪馬台国が一つはある。徳島県にもあり、千葉県にもあり、滋賀県にもあり富山県にもある。沖縄にもある。そのようにどこの県にもありますが、その中で、九州説と大和説、大和の方と北九州にあるという二つの説に分かれる。朝鮮半島に一番近い所にはじめて先進的国々が生まれたということで、それは九州だったと思うのです。近畿説をとる人はいきなり大和の方に邪馬台国が生まれたかのように言いますが、大和は遠いですから、朝鮮半島の国々に匹敵するような文明度を持った国が、玄界灘を越えて、まず九州に生まれて、それから大和の方に移動したというのが筋が通り、自然じゃないかと思うのです。

先ほど申しましたように、伊都国には楽浪、帯方郡から中国の官僚が来ておりまして、監視している訳ですから、そのすぐ側では具合が悪いですから、やや離れた所ではないか。

それは何処かと申しますと、やはり久留米あたりじゃないかと考えが自然に落ち着いてしまうのです。久留米の方にどうやって来たか、『魏志倭人伝』によりますと、朝鮮半島の西海岸を通りまして、

対馬から壱岐に来て、壱岐から松浦半島の末盧国、それから伊都国に来て奴国に来てそれから宇美国に出る、宇美がだいたい大宰府あたりです。それから投馬国に行って邪馬台国にいたる。

どういうふうに行ったかと云えば、各人各説でございますが、私の説では、博多に三笠川という川がありますが、それを遡って一旦大宰府あたりまで来る。そうすると宝満川の上流に接するのです。宝満川というのは筑後川の支流になります。三笠川を遡って宝満川の上流でバトンタッチして、宝満川を下って久留米に来るとというのが一番最短距離で一番安全な道だと思うのです。

当時の陸路というのは非常に危険なんです。野獣が居たり、敵が潜んで居たりします。『魏志倭人伝』には末盧国は、数メートル先も見えないと書いてあります。木が繁って、陸路は木が繁って大変なんです。そうすると海の道か川の道、要するに水路を通らないとだめなんです。それは明治初年の北海道の開拓で良く判るのです。みんな川筋を移動する。明治の北海道開拓団も陸路は行けない。アイヌがそうですから、アイヌに従って屯田兵も皆川を遡ったり下ったりしながらそれを交通路にする。

だから邪馬台国のあった弥生時代でも皆川筋というか水路をたどるのが交通路としては一番であった。しかも物を乗せますと、陸路を担いでいくのは大変なんですけど、舟に乗せればかなりの分量の荷物は運べます。舟は小さい溝みtainな小川でも行くのです。皆さんは大きな川でないと舟は行かないように思うけど、田舟というのがあります。田植えの時に舟を使いますが、ああいう舟は小さいのです。それで溝みtainな小川を舟は行くのです。引いて行けばいいのですから、漕ぐ必要もない、綱を付けて岸から引くだけです。そういう形で水路をたどるのが一番便利である。井上光貞という古代史家は、博多の沖から五島の沖を廻ってやって来たようなことを書いている。しかし海は荒れます。当時のちっぽけな舟では、五島沖のような所を安全に航行することは非常に難しいと私は思う訳です。今申しました三笠川を遡って宝満川の方に乗りかえて、それから久留米の方に来たと考えるのが一番安全ではないかと思う訳です。

邪馬台国にたどるのに投馬国というのを通るわけですが、投馬国については、いろいろな説がございます。日向に妻という所があります。宮崎県です。耳川の川口の美々津に妻という地名がございますが、私は久留米の近くの八女市の上妻、下妻というあたりが投馬国ではなかったかと思うのです。

だいたい学者というのは机上の空論が多いのです、特に古代史の学者、どうしてかというと、朝鮮半島から南下します。『魏志倭人伝』に南の投馬国にいたる水行二十日とか、南、邪馬台国に至る、女王の都とする所、水行十日、陸行一月とかいろいろ書いてあります。朝鮮半島の方から来る時に、あそこは非常に干満の差がはげしい。昔の百済にあたる朝鮮半島の西海岸は有明海と同じように干満の差が大きい。仁川だって干満の差が大きい。ですから潮が満たないと船は出ないのです。潮が引いている時は砂浜に乗り上げている状態、潮が満ちてはじめて船が動き出す。今は潮待ちですが、風待ちには風が吹かないと船は動かないので風を待つ。当時の船は帆があったかどうか問題になりますが、私は帆があったと思っています。

学者によっては、古代の舟の絵を書いたのは六、七世紀ころの装飾古墳にも出て来ます。それ以前の絵に帆が無いから、帆が無かったと云う人がいますが、帆が無ければ玄界灘は絶対に渡れない。それを証明したのは野生号という、一九七〇年代玄界灘をわたる弥生時代の舟を実験したことがございます。あのときも帆を使ったんです。帆を使わなくては動けなかったんです。

だから、先史時代の船の絵に帆が無かっただけです。最近では帆がある舟の絵も多少出ているようで

すが、先史古代でも帆が無くても動けるということはとても出来ない。帆がある場合は必要なのは風です。

風は南に行くのには北風が必要です。南風が吹いたら北の方へ行く。日露戦争の時に、宮古島の五人の漁民がバルチック艦隊を発見したんです。しかし宮古島には電信を打つ所が無いから、石垣島に行かねばならなかった。八重山に行こうとしたが北風が吹かない。南風ばかり吹いて、これだと北の方の沖縄本島に行ってしまう。だから行けないのです。やっと二日位して北風が吹き、帆をあげて石垣島に行った。帆があっても風がないとにっちもさっちもいかない。それも順風と逆風の二つがあるのです。そういうことになりますと、『魏志倭人伝』に水行二十日とか、十日とか書いてあると、一日に十五里ずつ進んで五日間で七十五里、という風に巻尺で計るように学者は机の上で考える。そんなことは絶対無い。風が吹かない時は一週間でも十日でも動かないのです。そういう時代のことから、『魏志倭人伝』の中に書いてある距離を一日に何里進むという具合に定規にはかったようにして行程に当てはめて行くということは非現実的なことで、それを平気でやっている学者もいるのです。漁民はそういうことは絶対考えません。干満の差がはげしい朝鮮半島の西海岸では満潮でないとだめです。船が動かない。それがまた、海が荒れる時は何日も休む。そういうことでやって来ているのですから、現実の場に移し変えて見ると、決して机上に考えることでは出来ないということが云える訳です。

今日のサブタイトルに使いました「大きな壺は大きな平野で生まれる」という言葉は、考古学者の森本六爾という人の言葉です。彼は非常に才人だったが早く亡くなりました。京都大学の小林行雄よりさらに先輩にあたる人です。「大きな壺はおおきな平野に生まれる。」だから邪馬台国は何所にあるかと考えますと久留米しかないのです。久留米ならば大宰府にも近い。

高良山の頂上から見おろしますと、筑後川が流れていて大変眺めがいい、茫洋とした感じがあって豊かな所だなという感じがします。ところが瀬高なんかは山があって狭い、人によっては、邪馬台国は瀬高から山手を山門郡山門郷と云い、邪馬台国の名はこの山門郷からとったという説があって、そこから瀬高を重視する。どうもそこだけでは解決が出来ない、そこで邪馬台国は瀬高の方から久留米の方に進出して来たという考え方が出てくる。

もう一つは、邪馬台国はだんだん具合が悪くなって細って小さくなって瀬高の方で終焉を迎えたという説があるようです。いずれにしても瀬高が邪馬台国と無縁だとは云わない。最初と最後の方は瀬高の方に移ったかも知れないが、邪馬台国の最盛期は、久留米を中心とした筑紫平野です。倭の国の中で一番大きな邪馬台国というのは、やはり九州の中で一番大きな筑紫平野の中に生まれる。というのがいかにも自然なんです。

奴国にも近いし、朝鮮半島にも近いというこれが一番自然だと私は考えます。

私は、倭の大乱の時に、物部氏が東に移動し、その後で邪馬台国も東に移ったというふうに考えます。

それは『日本書紀』の神武東征の記事に反映していると思う。神武東征というのはいわば勝手に作ったフィクションと一部の歴史家に云われていますが、そんなことは決してない。あれにはなにがしかの史実が反映していると考えます。

史実とは何かというと、それは私に言わせれば邪馬台国の東遷です。それが神武東征の記事に表れていると考えます。その話をこれから申し上げます。

中国の史書『後漢書倭伝』『魏志倭人伝』の倭というのは、これは日本にとってはあまり嬉しくない



言葉です。文化人類学者の金関丈夫の説ですが、人偏のイは人で、禾は稲だということです。稲の下に女がしゃがみ込む、これは真っ直ぐ立っていないと、云うのです。これはどういうことかという正直でない。要するにごまかすとか、率直でないとか、そういう意味がある。ということは、日本人は率直じゃない、心に思っていることを素直に表わさない。そういう国民だと中国人は考えている。それで倭という。

それに従いますと、日本人にとって倭というのは決して嬉しい言葉ではない。日本人は弥生時代から随分倭国と言われても我慢してきましたが、本心喜んでた訳ではないのです。

隋までは倭伝ですが、唐の時代になりますと、十世紀に『旧唐書』、それから少し遅れて『新唐書』というのがある。その唐書で日本の事を何と呼んだかと申しますと、『旧唐書』では「倭国日本伝」、倭国と日本国が二つ並んでいる。漢の時代から隋までは「倭国伝」、それがここに来て初めて倭国と日本が並んでいる。『新唐書』ではどうなっているかというと、もう倭国は無くなっていて日本伝となる。これが非常に面白いのです。『旧唐書』では倭国と日本というふたつの国がある。『新唐書』では倭国が無くなって日本伝となっている。

それから後は日本の名前だけが残ってくる。これはどういうことを表わしているか。

『旧唐書』の場合を申し上げますが、『旧唐書』の「倭国日本伝」には「日本国は倭国の別種なり」とある。日本は倭国とは別の種類である。倭種であるが少し違う。「その国日辺にあるを以って故に日本と名づく」、日本国と云うのは倭国の東の方であって太陽の出る所だから日本という名前をつけたとある。

その次に「あるいは云う、倭国自らその名雅ならずによって日本と改む」倭国は自ら優雅でない、卑しい名前を嫌がって、日本という名前をつけた。

更にその次に「あるいは云う日本は旧小国、倭の地を併せたりと」とある。『旧唐書』は、日本はもと小さい国だったが、これが倭国の地を併せたという。

『旧唐書』に日本は、もとは小さい国だったが倭国を合併したとある。これに対して『新唐書』はどう書いているか、「倭の名を惡み更めて日本と号す」、はじめは『旧唐書』と同じで、倭の名前がいやなので日本と変えたとある。その次に「使者自ら云う」日本から唐国に行った。使者が言うには「国日の出る所近し、以って名と為す」、国が太陽の出る所に近いから日本という名前にしたとある。その後「あるいは云う、日本はすなわち小国、倭のあわす所と為る」、日本は小さい国だから倭が日本を合併した。と書いてある。

どちらが本当か、『旧唐書』の文章と『新唐書』の文章は逆になっている。そして『新唐書』は「故に其の号を冒せり」、号を冒せりとは倭国が日本を併合して、国号だけは日本の名前を頂いていると述べている。この話は『日本書紀』なんかに一切ふれてない。これはそんなに遠い話ではなくて、これは中国の正史です。それにいいかげんなことを書いてあるはずがないのです。特にこの『新唐書』は、日本の使者から聞いたと書いてある。中国の都に行って天子に話をし、しかしかでございますと云った。その時に日本は小さい国なんで倭国から併合されました。だが日本という国の名は残しましたといふように中国に話しているのです。それをこの本に書いてある。これはどういうことを表わすか、これは私の考えでは、倭国大乱の時に日本の中央部に行った物部氏が作った王国のヒノモトを後から九州の筑後からやって来た邪馬台国が、併合したのじゃないか、それを表わしているのではないかと、私はそう考えるのです。それじゃ物部王国を何で日本と呼んだかと申しますと、『古事記』の序文に太安万侶の言として日下という姓があるけれどもこれをクサカと読ませる。それは古い習慣だからそれを改めないとしている。

『古事記』にはこの日下の字を書いている。『日本書紀』にはクサカを草香と書いている。今の東大阪市日下町という地名があるのです。『古事記』においては日下と書くけれどもこれは古くからの習慣でそうなっているのでそのままにしておきたいというのです。

『古事記』の時代には、なぜ日下と書いてクサカと読ませるかわからなくなっていた。でなければ『日本書紀』のように草香の字を当てればよいのです。

ではなぜ日下と書いてクサカと読ませるか、これもいろいろと説があります。一つはヒクサカから来たという説がある。ようするに太陽が沈むところ、というような説があるのです。そのほかいろんな説があるがどれもあてはまらない。

私の説では、日下をクサカというのはもともとヒノモトと読ませているのではないかと、日下の下をモトと読めばいい訳で、下をモトと読ませるのは『日本書紀』の神武天皇の記事の註に坂下と書いてサカモトと読めと書いてある。日下と書いてヒノモトと読めるのではないかと。

では、なぜヒノモトと読むかというと、ヒノモトとは太陽が出る所です。当時物部氏が、瀬戸内海を通して進んで行き、最後に行き着いた所、そこが東の果て、太陽の昇るところ、ということで、ヒノモトという名前を付けたのではないかと。そのヒノモトというのは日下という字になりますが、それが日本という字にもなるわけです。日下というのは今の東大阪市の日下町という所が東の果てになります。

だから当時の朝鮮半島や筑後から来た人も、そこが東の果てと思ったに違いないのです。そこでヒノモトという名前を付けた。ヒノモトのクサカという名前を付けた。ヒノモトはクサカの枕詞のようにしばらくは扱われていたのですが、ヒノモトのクサカと書いていたのがいつの間にかクサカと読ませるようになった。飛鳥をアスカとか長谷をハツセのように日下と書いてクサカとよませるようになった。そういうことで物部は河内の草香に拠点を築いて大和の方に入って行きまして、そこで銅鐸を作る。物部のシンボルは銅鐸です。

『日本書紀』によりますと、ニギハヤヒノ命が天磐船に乗って行った大和には誰が居たかということ、大和の主の長脛彦ながすねひこが居た。この長脛彦の妹がニギハヤヒのお嫁さんになっているのです。長脛彦とニギハヤヒは縁組をしている。いわば義兄弟です。そういう訳で長脛彦と物部氏の連合軍が、邪馬台国

の軍隊を迎え撃った、というのが私の考えです。

その邪馬台国というのは、九州にありまして、この久留米を中心とした。物部氏の原郷と邪馬台国の原郷は、筑後平野の一带にあり、両方とも同族なんです。物部氏の方が先に行き、邪馬台国が後で行く、後で行った邪馬台国が物部氏と長脛彦の連合軍を撃ち破った。倭国が日本国を併合したというのはそういう意味です。

邪馬台国が東へ移ったというのは『日本書紀』の神武東征に広く反映されていると思うのですが、『日本書紀』の神武天皇の記事は四年で終わるのです。その後は何も書いてない。わずか四年で終わるのです。

ところがその後の十代崇神天皇の記事、これは四年から始まる。そして『日本書紀』にはいずれもハツクニシラスメラミコトと書いてある。ハツクニですから日本を初めて作った天皇です。

日本を初めて作った天皇が二人いる。神武天皇と崇神天皇。両方ともハツクニシラス、どちらが日本の国を始めたのか、ということに成ります。

私はやはり崇神天皇だったと思う。神武天皇の記事は、四年で終わりますが、崇神天皇の記事は四年から始まる。崇神天皇の諡はミマキイリヒコと云う。ミマキイリヒコである崇神天皇の次の垂仁天皇もイクメイリヒコと云って、イリが付くのです。上田正昭という古代史家はイリ王朝と呼んでいる。

このイリというのは、大和に入ってきたという意味です。ミマキというのは、ミマからやって来た男という意味です。ミマとはミズマのこと、筑後川下流に三瀨という所がある。三瀨郡から大和にやって来た男がミマキイリヒコなのです。筑後川の下流流域の邪馬台国の首長がミマキイリヒコであった。邪馬台国の首長を『魏志倭人伝』ではミマカキとも呼ぶのです。ミマと言うのはミズマ・ミヌマを省略してある。四国の吉野川の中流に美馬郡がある。それから神戸の側にもミマという所がある。ミマはミズマの省略なんです。これは今の三瀨郡、大川あたりが三瀨郡でしょう。あのあたりからやって来た。イクメイリヒコのイクメとは、イコマで生駒、生駒山あたりからやって来た帝王という意味です。垂仁天皇は生駒山脈から大和に入って来ますから、そういう名前をつける。邪馬台国は狗奴国と戦争をするのです。邪馬台国の卑弥呼は使いを出して、魏に助けを求める。狗奴国は何処かと云うと、狗奴国の首長はククチヒクと書いてありますから、熊本の菊地郡あたりから南だと思うのです。球磨郡、人吉あたり、あるいは隼人のあたり、この狗奴国はどうも魏国と対立していた呉国と付き合い合っているらしい。魏国よりもっと南で、揚子江附近を中心とした大勢力を持っていた。

海軍の強い呉国と結んでいたのが狗奴国。狗奴国のクナはクメ、クミと通音である。だから久米郡でもあるし、球磨郡でもあるし狗奴国でもある。そこに狗奴国と邪馬台国が戦争をして、邪馬台国は魏国に援助をもとめるという対立の図式があった。

後では戦争が中断されまして、邪馬台国は狗奴国と和睦して、一団となって東の方へ移動する。久米族というのは神武天皇が引き連れて行くのです。久米族というのは狗奴国の後裔の隼人です。隼人を引き連れて行く、そういうことがあるのですが、『魏志倭人伝』に邪馬台国の北の方に投馬国がある。八女市の上妻下妻のあたりではないかという投馬国、その首長をミミ、副をミミナリと言う。なぜミミと言うか、これは五島列島、『肥前風土記』逸文に大ミミ、タレミミと言う酋長が居ると書いてあるのです。投馬国の首長がミミなんです。しかも『日本書紀』で神武東征の出発点となったのも日向の美々津、耳川、あれもミミ、それから『日本書紀』を見ますと神武天皇の子供にタギシミミとかキ

スミミとかミミの付く名前の皇子が三人以上居る。『魏志倭人伝』に倭国は海南島つまり儋耳島^{たんじ}の風俗と同じと書いてある。儋耳とは大きな耳を云う。金閼丈夫氏が海南島を調査したら、ハ一族という少数民族が今にして凄く大きな耳輪をしていて、労働する時や寝る時は頭の上に束ねて重ねているという。

その習慣が儋耳と呼ばれた海南島や南中国から日本の五島や投馬国に伝わって来たのではないかというのが私の考えです。

そうすると、南からの影響も非常に強いと言うことが云える訳でして、魏国が狗奴国と和睦した後も狗奴国の習俗は依然として残ったのではないかと考える訳です。

高良山の祭神というのは、玉垂命になっていますが、それはあまり素性のはっきりしない神です。祭神にはいろいろな神様の名前があがっているが、物部氏の神が主神と思う。

高良という名前はカワラに由来する。福岡県に香春と書いてカワラと呼ぶところが田川市の近くにあります。高良と香春は同じ意味だと吉田東伍は書いている。コウラとは頭梁です。

金属精錬等をする時の頭梁、頭梁をカワラという。カワラというのは家の屋根を覆うカワラ、それから亀の甲羅なんかも同じ、私の郷里の熊本では頭のことをゴラという。肥後の方言でゴラといのは頭^{あたま}が頭梁^{かしら}に通じるからです。その点。高良も香春同じだと思う。

香春は鉾山で、渡来人の新羅の神が来ている。新羅の神が来てそこで二の岳、三の岳で鉾物を掘り出している。その時にヒメ神と言う山の神を祀るのです。二の岳の中腹に今でもあります。

それが高良山にもヒメ神を祀って居る。その祀る主は誰か、大祝は物部氏^{おおはふり}なんです。神主のトップは物部氏^{しょうはふり}、小祝が安曇氏と云うわけで、これは高良山と物部は切っても切れない。物部氏がこの周辺の神様を奉祀しているということは、物部が高良山に本拠地を持っていたということ。それで磐井の乱の時も、物部^{あらかひ}麴鹿火はこの久留米大学のキャンパスのある三井で磐井と戦います。物部は高良山に本拠地を持っていますし、どうも磐井は八女の方から来たようです。八女には磐井が死んだ後も子孫の古墳が沢山あります。三井は決戦場なんです。物部はここを守った。という訳で、高良山は物部が奉祭した、祀った神なんです。私はそう考えておまして、高良は香春なんかとも関係しているということは、物部が金属の制作をする工人を支配していたということと関係がある。物部目連というのは伊賀の所で戦争をする、その時、企救物部を連れて来る。企救とは何かというと香春に近い所です。そこで鉾山を掘っている、その鉾山に関係がある連中を伊賀まで連れていったのです。

銅鐸は弥生時代にすっかり姿を消してしまう。これは一斉に消す。墓からは全く出ない。そして山の中腹の傾斜面にヒレを上、ヒレは銅鐸の縁にあるギザギザです。それを縦にして三尺か四尺の浅い所に埋納してある。それで墓からは殆んど出ない。

銅鐸は一斉に姿を消した。なぜ墓からは出ないのか。それは物部氏が支配していた王国が、外敵に滅ぼされ消滅した証拠ではないか。

外敵とは何か。邪馬台国です。ミマキイリヒコが邪馬台国の首長として乗り込んで来た。そして物部王国をほろぼした。それで古墳から銅鐸のかわりに今度は鏡が出る。弥生時代の九州からは、鏡は沢山出ます。弥生時代の鏡は九州から出るが近畿からは出ない。

弥生時代の九州から鏡が出るが、近畿地方の古墳からも鏡が出る。弥生時代の鏡が出た九州の勢力が大和の古墳時代を受け継いだと考えればすんなり行く。弥生時代の銅鐸を持った近畿の連中は皆姿

を消してしまう。これは物部王国が抹殺されたと私は思う。

物部氏は邪馬台国に打倒されますが、『旧事本紀』の中の「国造本紀」の東海の国造を見ますと、殆んど物部です。美濃、尾張、遠江の国造。ということは何を表わすかということ、物部氏は近畿地方で一敗地にまみれて、東海道を東へ東へと移って行ったのではないかと私は思う。そして常陸国に一時期とどまった。

常陸国の信太郡というのは、孝徳天皇の時に物部氏が願い出て郡を作ってもらった。そして自分が首長となった。そういうふうに常陸でも物部氏の勢力が続く。

その後日談は東北地方に舞台は移りまして展開するのですが、秋田氏の系図の中に日下將軍、クサカ^{くさか}というのが出てくる。これは一体何か、という問題ですが、おそらくそれは、河内の、先程申しました西の草香（日下）に縁がある。

物部氏の影響がそこまで何千年という時間をかけてつながって行ったのではないかと私は考えています。

駆け足で誠に申し訳ありませんがこれで私の話は終わりたいと思います。ありがとうございました。



注) 上記文章は、谷川先生の出身地である熊本地名研究会（小崎龍也さん）の講演記録を転載したものである。

活動報告

1. 研究部会報告

1) 欧州研究部会

2007年3月に大学院の後期博士課程指導担当教授の飯田武郎文学部教授の後任として、部会長の職を児玉が引き継いだ後、後期から、4つの企画をたて実行した。それらは以下である。

まず、2007年10月17日は、今年度欧州部会最初の企画として、北九州大学外国語学部の山本直准教授をお招きし、学内教室において、学生諸君を対象として「欧州における人権状況」というテーマで講演をお願いした。

山本直准教授はEUの人権問題では重要な研究をされている。幸い、文学部教授もお見えになり、学部横断的な交流となり、比較文化研究所欧州部会を預かるものとしては、ささやかな貢献となった。

また、11月1日土曜日には3時～5時で、「現代ヨーロッパの紛争処理 学生を使ったシュミレーション授業の実践」と題して、宮家邦彦立命館大学客員教授（AOI外交政策研究所代表）に講演と、学生指導をいただいた。これは外務省キャリアの経験をお持ちの宮原信孝現教授の発案になる外交ゲームの導入、実践の一企画であり、文学部国際文化学科と法学部国際政治学科という斬新的学部横断の学術教育企画の一助とした。

2008年3月4日には久留米大学比較文化研究所での木村汎北大名誉教授の講演が演題を「プーチンの対ヨーロッパ政策」としてアクロス天神のサテライト教室で開催された。

先生は著名なロシア政治研究者であり、木村先生の50年にわたる研究から繰り出される貴重なお話を拝聴しながら、実感したのは、ロシア政治の不可視性であった。

特に新たに選出されたメドヴェージェフ大統領と、制度上やむを得ず、2期8年務めた大統領職を下りて、部下である「若造」に大統領職を譲り、その権力においてはるかに大統領に及ばない首相に就任し、一種「格下げ」状況になったプーチンと、新大統領との今後のパワーバランスと個人的確執の行方についてはきわめて興味深いものであった。

21世紀の民主化の時代を迎えても、スターリン時代とは何も代わらないロシア政治の本質をまさに突いたお話をされて、落鱗の思いであった。

2008年3月24日には年度の最後の企画として、アクロス天神のサテライト教室において、ステーブン・デイ准教授の「イギリスとEU」（通訳付き）、児玉昌己「リスボン条約とEUの将来」の2つの連続講演を開催した。通訳は九州大学法学部の八谷まちこ先生。

あいにくの空模様だったが、45名の参加者を得て、イギリスとEUの「微妙な」関係を熱く語られ、参加者は報告と、司会を務めた私も含めて、大いに知的刺激を受けた。

（文責 児玉 昌己）

2) 外国語研究部会

外国語教育研究部会は、外国語教育のバックグラウンドの人間教育をモットーに、毎年外国語語学、文学と教育のみならず、その周辺分野の異文化コミュニケーション、異文化理解、人間関係など幅広い課題を取り上げ、専門的な研究者を講師に、教員及び地域住民を対象にした講演会を実施している。

2007年度は、上述した視点からホリスティック・コミュニケーション論をテーマとする講演会を実施した。講師として本学外国語研究所の岩田好司先生にお願いした。参加者は本学の教員 7 名であった。

演 題：ホリスティック・コミュニケーション論

ープロセスワークを中心にー

講 演 者：岩田 好司（久留米大学外国語教育研究所教授）

日 時：平成20年3月19日 水曜日 16：30～18：00

場 所：メディアセンター4F 第1LL教室

講演内容：

ホリスティック・コミュニケーション論とは発表者の造語であるが、ホリスティック教育に所属し、それが重視する「つながり」（全関連性）をコミュニケーション（相互作用）の観点からとらえる教育・研究の領域と定義する。

関連領域は多様だが、基盤となるレベルは3層になっていて、次のように整理できる。

- 1) 認知レベル：（異文化）コミュニケーション論、人間関係論、協同教育論、外国語教育論など。
- 2) 無意識レベル：深層心理学（ユング心理学、プロセスワークなど）。
- 3) スピリチュアルレベル：マインドフルネストレーニング、禅トレーニング、センタリング、呼吸法など。

今回の発表では、ホリスティック・コミュニケーション論を概観した後、無意識レベルの要となるプロセスワークに焦点をあてる。

プロセスワークはユング心理学から派生したが、単なる心理療法にとどまらず、グループワーク、組織変革、ミディエーション、葛藤解決などに援用されている。基礎理論を検討しながら、（異文化）コミュニケーション教育、多様性（多文化）教育、外国語教育、教師教育などへの応用の可能性をさぐる。

（文責 李 偉）

3) 健康文化研究部会

今日的な健康問題の背景には、生活形態の近代化、都市化、文明化が急速に進み、身体活動の省力化や生活全般のスピード化・情報化によるストレスの多様化および食生活の欧米化等、多岐に渡る要因が考えられる。したがって、人々の健康の保持・増進には、定期的な運動だけでなく心理面および食物摂取状況や食行動等様々な対応が不可欠とされる。スポーツ活動には、安全で楽しく継続的であればならない。競技力向上には、トレーニングによる運動能力の改善やスキルの向上が要求される。

健康文化研究部会は、毎年健康の保持・増進、健康づくりおよびスポーツ活動や競技力向上に関す

る身近な課題を取り上げ、専門的な研究者を講師に、教職員・学生および地域住民を対象にした公開講演会を実施している。

2007年度は、上述の観点からテレビでも放映され話題ともなった脳の活性化に果たす運動の影響、運動実施中の緊急時の備えやその冷静で適格な対応の方法をテーマとする公開講演会を2回実施した。講師としては筑波大学の征矢英昭先生と本学経済学部菅原洋輔先生にお願いした。参加者は、本学の学生・教職員、健康運動指導士、栄養士、体育指導員および地域住民等約50名であった。公開講演会の内容は下記に示す通りである。

1 回目

— 認知機能と運動、そして健康 —

演 題：「楽しい運動で高める脳のフィットネス」

講 演 者：征矢 英昭 先生（筑波大学体育科学系准教授）

日 時：平成19年8月2日 木曜日18：30～20：00

場 所：御井学舎500号館 3階 53A教室

講演内容：脳を活性化するためのメカニズムや活性化には運動が重要なことについて解説があり、実技指導も行われた。

2 回目

— スポーツ講演会 — （久留米市体育協会と共催）

演 題：「緊急時の準備と対応」

講 演 者：菅原 洋輔 先生（久留米大学経済学部・講師）

日 時：平成20年2月6日 水曜日18：30～20：00

場 所：久留米大学御井学舎 みいアリーナ1階 視聴覚2教室

講演内容：緊急時に対する備えや緊急事態発生時の適切かつ迅速な対応についての手順や方法について詳しく説明があった。

（文責 吉水 浩）

4) 地域博物館研究部会

筑後地域は、筑後川水系を中心に形成された地理的環境のもと、原始・古代から多彩な文化を生み育んで歴史的環境を構築し、現在に至っている。久留米大学はこの「流れ」の中で、2008年に創立80周年を迎えることとなり、筑後地域唯一の総合大学として位置づけられている。筑後川流域の将来計画を策定するうえでの大学組織の役割は、周辺自治体や市民と共に協力・連携し、この歴史的環境を保持し地域文化を継承していくことである。本研究部会は、平成18年4月に発足したばかりの部会ではあるが、この将来計画の中で、関連資料の保存・収集、さらに収集資料の「情報発信」を念頭に置き、成果を地域に還元することのできる方法を検証することを目的としている。

活動報告

基本構想の策定 — 久留米大学の広報・文化活動としての九州戦略 —

【課題】



- ・九州の道州制導入に向けた将来展望の必要性
- ・九州、沖縄 8 県を視野に入れた学生募集の強化
- ・アジア（中国、韓国等）の留学生の受入の促進

【方策】



- ①オープンキャンパスの常設化による情報発信へ
- ②寄贈・寄託資料を受入、積極的な広報・文化活動へ
- ③文系学部及び医系学部のミュージアムを整備、より創造的な人材育成



久留米大学総合ミュージアムの整備（文系博物館）（医系博物館）

調査・視察

国立科学博物館

東京上野の森にある国立唯一の科学系博物館で、施設は古いですが、室内を改装して展示室として利用されている。展示手法に斬新さを取り入れてあり、子供に解りやすい解説や施設の改修・展示手法は参考となる。

長崎歴史文化博物館

平成18年秋に開館した歴史系博物館で、長崎県と長崎市が各々の設置条例を制定して造られており、九州で最も早く指定管理者制度が適用された施設である。世界に開かれた長崎を舞台に開花した長崎文化とヨーロッパ文化の融合を展覧している特色ある施設である。

印刷博物館

凸版印刷が開設した企業博物館で、印刷の歴史と印刷技術の将来の展開を示唆した施設である。大阪万博博覧会を企画立案した頭脳スタッフが参画して展示手法に知恵をしぼった展示は参考となる。

日本歯科大学いのちの博物館

新潟市に開設されてある日本歯科大学の付属博物館で、日本歯科大学創設者の顕彰室と歯科の分野に限定された関係資料の展示室から構成されている。とくに展示室は、展示と収蔵が同時に行われている「収蔵展示」の手法が取られている。

川崎医科大学博物館

岡山県倉敷市に開設されている川崎医科大学の付属博物館で、医学系の総合博物館としては国内では唯一の施設と思われる。博物館は一階が生命に関係する科学展示室とシアターで、一般の見学に供されている。二階と三階が医学系専門展示室で、医学系の講義や研究のため教官や学生に限定して利用されている。

日本医療機器資料館

千葉県印旛村にある医療機器専門の資料館で、印旛村出身で名古屋医科大学の外科の教授であった研究者の収蔵品で構成されている。過去に使用された多種多様な医療機器が多く収蔵されている。

八女伝統産業地

八女市に現存している伝統的産業の久留米絰染色、線香の原料製作、八女和紙、八女提灯の制作過程の調査を実施。

吉井の街並み

今に残されている吉井の町並みと展示施設とひな祭りの状況を、写真で収録。

筑後川流域窯業地（・日田小鹿田焼・小石原焼）

大分県日田市の小鹿田焼と福岡県朝倉郡の小石原焼の窯場の現状と製作工程の写真記録を実施。

（文責 森 醇一朗）

5) 福祉コミュニティ研究部会

福祉コミュニティ研究部会は、平成15年に発足した研究会で、当初は月1回、保護司会を中心にした薬物依存症者の居場所づくりについての研究会を開催していた。しかし、研究会だけでは薬物依存問題に対する市民の意識が広がらないため、シンポジウムや講演会を通じて市民のまちづくりに対する関心を高める活動へと発展した。

これまでのシンポジウムや講演会等の取り組みについては次の通りである。

- ① 第1回目『ドラッグに負けないコミュニティを目指して』（平成16年度）
- ② 第2回目『ドラッグに負けないコミュニティを目指して』（平成17年度）

以上のような取り組みによっても市民の関心は弱いことから、このような問題をもっと広く、予防福祉的な視点から、家庭の絆や地域の絆との関わりにおいてPRする必要があるという結論に達し、これが次年度の「食育」や「健康生きがいづくり」というテーマにつながるようになった。平成18年度の取り組みは次の通りである。

- ① シンポジウム『食の原点を語る（平成18年度）』
- ② 講演会として京極高宣氏による『健康生きがいのあるまちづくり（平成18年度）』

この延長線上に、平成19年度は、大学の社会貢献の一つとして産学官民協働による『健康生きがいのあるまちづくり』を実施したが、この事業が平成19年度の文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業（新規分）に採択されたので、これまでよりもより大規模な地域連携システムづくりに向けての事業に取り組んだ。この報告については別途、社会連携研究『健康生きがいのあるまちづくり』に報告する通りである。

また、この研究部会は、福祉のまちづくりについての先進地、玉名市健康福祉フェア（2007年11月）を視察し、玉名市において健康福祉システムづくりの中心的役割を果たす佐藤林正教授（九州看護福祉大学）に対する聞き取り調査や、保健師のヘルスプロモーションに対する考え方、行政と大学との連携、大学と地域との連携、玉名市におけるまちづくりの基本的な視点や理念などについての聞き取り調査を行った。

さらに、筑後川流域圏の市民参加のまちづくりという視点からは、松尾匡教授による元炭鉱マンによるまちづくり市民事業の現地視察と報告会が行なわれた（2007年12月）。

筑後川流域圏の文化を語り継ぐという視点からは、川野栄美子氏（大川市議会副議長）による『民話と現代若者考』というテーマの研究会が開催された（2007年12月）。

（文責 保坂 恵美子）

6) 文化財保存科学研究部会

前史

- 2004年 4 月 筑後文化資料室設置。
- 5 月 御井図書館運営委員会の中に「筑後文化資料室作業部会」が設置され、各方面への寄贈の依頼・資料収集・整理などの活動を開始した。
- 7 月 資料保存施設（福岡県立図書館・九州大学文書館・福岡市博物館・野田宇太郎文学資料館）視察研修を実施。
- 2006年 6 月 Kプロジェクト設立。筑後文化資料室の資料収集の過程で、虫害対策の必要性を痛感して、防虫効果を有する資料保存用品の開発を開始した。その際に、地域との連携を目指すこととした。Kプロジェクトは学内有志のボランティアの研究団体である。
- 2007年 1 月 文化財保存科学研究部会設立。
上宮健吉先生を比較文化研究所特別研究員として迎える。
- 3 月 久留米大学比較文化研究所文化財保存科学研究部会と九州ミュージアムIPM研究会との第1回合同研究会を九州国立博物館で開催。この内容は「朝日新聞」に報道された。

（2006年12月 比較文化研究所運営委員会提出資料）

プロジェクト研究について

私たちは久留米大学の教職員で作ったボランティアの研究団体であるKプロジェクトと連携させて、久留米大学の比較文化研究所の研究プロジェクトの一環として、文化財保存の問題を検討してきました。図書資料の生物的劣化の要因の一つ、昆虫による紙資料の加害、なかでもシバンムシ類の和紙への加害を回避し、長期保存に適した各種の用途の紙の開発を考えています。つまり書いて記録に残す紙や、その他の防虫の用途の紙であります。紙の害虫といえば、実際的にはシバンムシが最も重要です。シミやゴキブリやチャタテムシ、シロアリなどはシバンムシに比することはできません。

北海道を除く我が国では、和書の害虫としてフルホンシバンムシとザウテルシバンムシの2種のシバンムシが特定されます。国外では、パルプ紙、つまり洋紙に日本にもいるケブカシバンムシ、ジンサンシバンムシ、あるいは日本には分布しないイエシバンムシの加害が知られているそうです。このことは、洋紙と和紙の素材が違うからという理由も考えられますが、我が国では何百年も保存された紙、つまり和紙にいつしかシバンムシが侵入し、明治以降の洋紙はすぐに劣化してしまうので、虫の

つく間もなく、ボロボロになるということかと思います。

さて、いまやアーカイブズとして電子化情報の時代に、アナログの保存紙とはと、奇異に感じる方もあるかと思います。情報メディアとして記録する紙の利用は増加の一途で、パルプ紙として膨大な森林資源が使われ続けております。しかし、それらの文書は、100年も保存が利かない使い捨ての用途でしかありません。長く保存できる紙は今もなお必要であります。つい最近、文化財や博物館の所蔵品を毒性のつよい燻蒸剤で処理することが禁止されました。これまでのような定期的に燻蒸すればよいという時代から、虫が来ない環境、虫の付かない紙とか、虫を忌避する恒常的な方策が注目されるようになりました。そしてそのような用途の紙は燻蒸剤や農薬のない時代に自然の産物で工夫して作られていた古代の紙に求められるのかもしれません。

和紙、織物、木工竹製品には、わが国に固有の伝統文化があり、自然の文化として豊かな美の世界の精神的な拠り所となっています。ヒトが自然と共生して生きてゆかねば、その精神的風土は残せないと言われます。私たちのプロジェクト研究では、将来的には和紙に止まらず、科学的に検証しながら自然を生かした文化財保存用品の開発をしていきたいと考えています。

2007年度の年次報告

- 4月 研究会実施。また、クララの実験的栽培を八女の近藤さんに依頼。
- 5月 狩野がローマでMARIA VERA QUATTRINIさん（東洋美術の修復専門家）と意見交換。
- 6月 研究会実施。八女の近藤さん訪問、クララの栽培を視察。
- 7月 特許仮申請。
- 8月 研究会実施。
第2回九州ミュージアムIPM研究会に参加（九州国立博物館）。
松枝工房（藍生庵）見学。
- 9月 九州国立博物館開館2周年記念第2回東アジア紙文化財修理シンポジウム ― 文化をつたえる紙の路 ― に参加。
狩野がフリア美術館、サックラー美術館を訪問（ワシントンD. C.）。
松枝工房（藍生庵）見学。
- 10月 第3回九州ミュージアムIPM研究会に参加（九州国立博物館）。
- 11月 多久視察。細川章さんからお話を伺う。
- 12月 研究会実施。
外国の高校生約10名、筑後文化資料室作業室を見学。文化財保存用の開発された製品について説明。
- 1月 研究会実施。
- 2月 第5回九州ミュージアムIPM研究会に参加（九州国立博物館）。
- 3月 久留米大学比較文化研究所文化財保存科学研究部会と九州ミュージアムIPM研究会との第2回合同研究会を九州国立博物館で開催。

（文責 狩野 啓子）

7) 民事法研究部会

本学の民事法研究者は従来は法学部に属しており、その教育方針にそう人数と資質の程度であり、他大学との研究会が催されていたこともあって、本学独自の研究会は形の上では見られなかった。しかし、平成16年度に法科大学院が設置されるに伴い、人数も増え、かつ、民事法の純粋研究者のみならず広く実務経験も有する教員も加わり、多様な資質を誇る教員の層が形成された。そのふれ合いの中から、自ずと相互研鑽の必要性が語られ、その意欲も高じてきた。そのような次第で、平成17年に民事法研究部会が生まれた。

当初は期待どおりの成果が上げられた。平成17年度4回、同18年度3回の研究会を開催して、なかには優れた研究として評価を得たものもあって、活気があった。しかし、その後は法科大学院が研究以外の自己点検評価等の管理面にも時間と労力を割く必要に迫られるに至り、希望はあってもその要請を満たすことができなくなり、平成19年度及び20年度における研究会の開催は実際には途絶えてしまった。

平成19年に、法科大学院において第三者評価が実施されたが、文部科学省から、成績評価が甘すぎる、FD活動が乏しいという二点について実情報告をするよう留意事項が申し渡され、その対応が未だに続いている。

しかし、最近では、法学部及び法科大学院の教員に他大学との出入りがあり、多忙にもめげず民事法研究部会をもり立てようという声が聞こえている。

今後に期待して頂きたい。

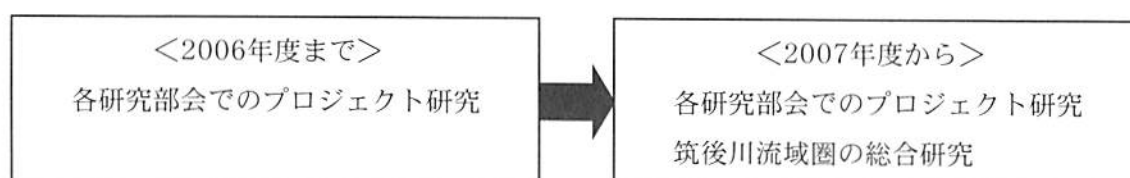
(文責 東 孝行)

2. 筑後川流域圏の総合研究（大川研究：2006～2007）

1) 「筑後川流域圏の総合研究」の位置づけ

久留米大学比較文化研究所（以下、研究所と略す）は、医学部、商学部、法学部、経済学部、文学部の 5 学部および、健康・スポーツ科学センター、外国語教育センターの教員で構成されており、これまで学際的な研究が行われてきた。また、研究所では、2007年度現在、①健康文化研究部会、②欧州研究部会、③民事法研究部会、④外国語教育研究部会、⑤福祉コミュニティ研究部会、⑥文化財保存研究部会、⑦地域博物館研究部会、⑧ジェンダー研究部会といった 8 つの研究部会が存在し、その各部会では、講演会やシンポジウムなどを含めた研究活動が盛んに行われている。

これまでのプロジェクト研究は、各研究部会の中で完結するものが多かった。しかし、2006年度より、当時の所長（堂前亮平教授）が、大学の地域貢献事業が盛んに叫ばれる中で、「研究所も地域貢献を見据えたプロジェクト研究を積極的に展開していかなければならないし、なによりも久留米大学をもっと多くの地域住民の方に知ってもらえる取り組みを行っていかなければならない！」という熱い思いから、この「筑後川流域圏の総合研究（以下、総合研究と略す）」の萌芽的な取り組みとなる「筑後川流域圏の地域文化研究部会」を立ち上げた。現在では、この部会を廃部し、広く所員が参加できるプロジェクト研究として、展開されている。つまり、この総合研究は、研究所における地域貢献事業として各部会での活動とは別に位置づけているのである。



2) 「筑後川流域圏の総合研究」の全体計画

この総合研究は、上記のような流れを経て、2006年度より、その取り組みが始まった。その全体計画は表 1 のように示すことができる。対象地域は、「大川」「三潴」「久留米」「浮羽」「日田」の 5 周辺地域。筑後川を川下から川上へと移動するように、2 年ベースで対象地域を変更し、全体としては 10 年の研究期間を設定している。また、各周辺地域の 2 年間のスケジュールは、1 年目：参加メンバーの募集から当該地域の特色を知るための研究会の開催、2 年目：各領域テーマでの研究開始し、参加メンバーによる学内勉強会の開催を経て参加メンバーによる共同報告書の作成を計画している。研究予算は、参加メンバーや報告書作成年によって増減はあるが、おおよそ年間 200 万～250 万を想定。今後は、学内予算だけでなく、学術振興会の科研費申請も合わせて検討したい。報告書は「筑後川流域圏の総合研究」というタイトルシリーズで、5 地域の報告書を作成。その作成に合わせて当該地域での研究成果報告会を開催する。

表 1 筑後川流域圏の総合研究の全体計画

項 目	内 容
対象地域	「大川」「三潴」「久留米」「浮羽」「日田」の 5 周辺地域
研究期間	各地域での研究期間を 2 年間とし、全体としては 10 年の研究期間を設定 〈1 年目〉対象地域の特色を知る
各周辺地域の 研究スケジュール	1) 参加所員の募集、2) 現地視察の開催、3) 各領域テーマと年間予算の提出、4) 学内研究会の開催 〈2 年目〉各領域テーマでの研究開始から報告書の作成 1) 学内研究会(各研究領域の中間発表)の開催、2) 報告書の作成
研究予算	〈2006 年度〉2000000 円: 筑後川流域圏の地域文化研究部会の予算 〈2007 年度〉2578399 円: 参加メンバー研究費、報告会、報告書作成費用等
報告書	「筑後川流域圏の総合研究」というタイトルシリーズで、5 つの周辺地域の報告書を作成
報告会	対象地域となった 5 地域での報告会を開催

3) 大川研究

2006-2007 年度は、筑後川下流域の大川市を対象地域に選び、総合研究をスタートさせた。堂前、浅見、森、行實の 4 名が大川市長(植木光浩)に会い、大川研究への協力をお願いした(2006 年 8 月 9 日)。同年 9 月 20 日には、同市企画課の協力を得て現地視察を実施した。視察参加者は 16 名。場所は、①風浪宮、②大川中央商店街、③小保・榎津の町並み、④若津港、⑤筑後川昇開橋、⑥大川家具団地、⑦大川市立清力美術館、⑧導流堤、⑨古賀政男記念館、⑩有明海沿岸道路、⑪国際医療福祉大学など、多くの施設を見ることができた。

(1) プロジェクトメンバー

本プロジェクトのメンバーは、現地視察を終え、大川地域に興味関心を持った教員により構成することとした。その結果、10 名の教員が同プロジェクトのメンバーとして構成された(表 2)。

表 2 大川研究メンバー

所属	氏名	専門
比較文化研究所	森 醇一郎	博物館学
比較文化研究所	行實 鉄平	スポーツ経営学
経済学部	浅見 良露	経済地理学
経済学部	駄田井 正	経済学
経済学部	大矢野 栄次	経済政策
商学部	谷口 豊	比較経営論
文学部	堂前 亮平	都市地理学
文学部	保坂 恵美子	福祉社会学
文学部	吉田 洋一	歴史学
健康スポーツ科学センター	吉水 浩	運動生理学

(2) 大川研究会の開催

2006 年度は、まず、大川地域の特色を知るために、鈴木廣先生に大川市の歴史的な背景も含め、社会調査で得られた内容を教授いただいた。そして、2007 年度は、各研究テーマで活動を行い、ある程度の結果を得た教員(大矢野、行實、吉田)に、その内容を報告していただいた。以下、表 3 に計 4 回の研究会の概要を示しておく。

表 3 大川研究会の内容

回数	演題	講演者	日時	場所
第 1 回	1960年頃の大川について	鈴木 廣 (久留米大学比較文化研究所 客員教授)	2006年 9 月 13 日(水) 18時～20時	800号館 2 階 823教室
第 2 回	風浪宮と倭国	大矢野 栄次 (久留米大学経済学部 教授)	2007年 1 月 24 日(水) 17時～19時	100号館 3 棟 2 階 比較文化研究所 会議室
第 3 回	大川市におけるスポーツ振興 ー市民調査を手がかりにー	行實 鉄平 (久留米大学比較文化研究所 講師)	2007年 7 月 4 日(水) 17時～19時	
第 4 回	大川市域の近世	吉田 洋一 (久留米大学文学部 講師)	2007年 10 月 23 日(水) 16時～17時	

(3)公開講座の実施

2007年度の公開講座として「大川の成り立ちを探り、まちづくりを考える」というシリーズをくみ、本プロジェクトの成果の一部を紹介させていただいた。表 4 は、その内容を示したものである。

表 4 2007久留米大学公開講座「大川の成り立ちを探り、まちづくりを考える」の内容

演題	講演者氏名	所属	開講日	時間	会場
大川の歴史 風浪宮の神様たち	大矢野 栄次	久留米大学 経済学部教授	5月17日(木)	18:30 ～ 20:00	御井 キャンパス 500号館 1 階 51A教室
都市社会学事始め 大川調査への道程	鈴木 廣	久留米大学 比較文化研究所客員教授	5月24日(木)		
大川の女性とまちづくり	保坂 恵美子	久留米大学 文学部教授	5月31日(木)		
大川市におけるスポーツ振興	行實 鉄平	久留米大学 比較文化研究所講師	6月7日(木)		

(4)大川地域研究の発行

2008年 3 月、大川地域研究の成果として、「大川研究」を発刊した。本報告書は 7 つのテーマについて書かれたものであり、総数 145 頁となっている。表 5 は、その内容（目次）を示したものである。なお、次年度は、本報告書を元にして、大川市での研究成果報告会を行う予定となっている。

表 5 筑後川流域圏の総合研究 1「大川地域研究」内容

タイトル	著者
大川市の地域スポーツ振興戦略	行實 鉄平
大川の風浪宮	大矢野 栄次
筑後川まるごとリバーパークと筑後川下流域観光	駄田井 正
	浦川 康弘
	夏 広軍
大川市における女性とまちづくり ー男女共同参画社会づくりに向けてー	保坂 恵美子
大川市域の近世 ー漁場争い(吉原家文庫)を中心にー	吉田 洋一
有明海の海苔養殖導入と大川市における漁業集落の変容	堂前 亮平
大川家具産業の動向について	谷口 豊



(文責 行實 鉄平)

3. 社会連携研究「健康・生きがいのあるまちづくり」

『第 1 回健康生きがいのあるまちづくり(ゆにばひろば)フェスタ』を終えて — 筑後川流域圏における産学官民協働と 地域コミュニティ開発に関する研究の一貫として —

このフェスタは、大学の地域貢献の一環として行われる教育研究活動の一つで、筑後川流域圏をエリアとする「健康生きがいのあるまちづくり」に向けての産学官民協働と、地域コミュニティ開発を目的とする事業として、平成19年度の文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業（新規分）に採択された事業である。

筑後川流域圏は、福岡県、佐賀県、大分県および熊本県にまたがる筑後川水系によって結ばれた広大な地域で、その中流域に位置する久留米市は、九州を縦横に結ぶ人・物・文化の結節点としての役割を果たし、当市が周辺地域に及ぼす影響は大であった。ところが、産業化・都市化に伴う人口の都市集中と核家族化・家族意識の変化などで、地域住民の生活環境は激しく変化し、少子高齢化問題への対応力も弱体化している。

このような現状をふまえながら、今後のまちづくりには高齢者や子ども、障害者、女性など、あらゆる階層の地域住民が、予防福祉・参加福祉の視点から「健康で生きがいのあるまち」を創造することが重要になるであろう。その方法として、ここでは筑後川流域圏をエリアとする産（産業）・学（大学と小中高校）・官（行政）・民（住民）協働のシステムづくりと、流域圏文化を共有する「ひろば」づくりを構想したい。すなわち、大学を軸とした広場（「ゆにばひろば」＝大学広場）づくりを通じて、ヒト・モノ・ココロと情報をつなぎ、地域文化を再生し、次世代に継承する活動を通じて、地域の活性化に貢献することをこの事業の目的とするものである。

また、この事業は、本学がこれまで地域貢献のひとつとして行ってきたシンポジウムや講演会（「ドラッグに負けないコミュニティを目指して」、「食の原点を語る」、「健康生きがいのあるまちづくり」）の延長上に行われる事業であり、ここでいう健康には「心の健康」「体の健康」「家族の健康」「コミュニティの健康」「自然の健康」が含まれる。こうした健康づくりに向けての広場（ゆにばひろば）づくりやイベント等を通じて、地域住民の健康への関心を高め、地域アイデンティティを形成し、地域における子育て支援や多世代交流によるネットワークを生み出すことが、「健康生きがいのあるまちづくり」に繋がる道と考えられる。

以上のような観点から、平成19年9月23日（日）と24日（祝）の2日間にわたり、久留米大学御井学舎で『第1回健康生きがいのあるまちづくり（ゆにばひろば）』を開催した。

フェスタの主催者は久留米大学比較文化研究所、共催は久留米大学文学部社会福祉学科と筑後川流域圏地域づくり何でも相談会で、後援団体として、久留米市、大川市、久留米市教育委員会、久留米市社会福祉協議会、久留米市食育推進委員会、（社）久留米市医師会、久留米商工会議所、久留米市農業協同組合、久留米市立南筑高等学校、久留米市民生委員・児童委員協議会、久留米保護区保護司会、久留米市消費者連絡協議会、久留米市食生活改善推進会、久留米市校区・地域社会福祉協議会、久留米市ボランティア連絡協議会、NPO法人栄養ケア・ちっこ、ブリヂストンスポーツアリーナ株式会社、

NPO法人シニアネット久留米、ポテト王を語る会、ブッククラブ大川、NPOさくら会、筑後川まると博物館、NPO法人子育てボランティアくるるん、NPO法人有明海ぐるりんネット、朝日新聞社、西日本新聞社、読売新聞社、くーみんテレビ、ドリーム・エフ・エム、テレビ西日本、九州朝日放送、久留米大学文学部・経済学部・法学部・商学部・健康スポーツ科学センター、久留米大学愛恵会、久留米大学BBS会・KOS会等の団体が含まれている。

第1日目のメインイベントは、「健康生きがいのあるまちづくり『私の提言』」というテーマで市民に広く意見を募り、優秀作品を表彰・発表する『私の提言ひろば』（81A教室）と、御井アリーナで開催された『和太鼓ひろば』であった。また、第2日目のイベントは、『コミュニケーションひろば』（800号館）として、子どもの絵本の読み聞かせや「巻き寿司づくり」、子どもの遊びやバザー、車椅子ダンスの外、御井アリーナでは『踊りフェスタ』が開催された。2日間の参加者数は延べ数で約1500～1600名であった。

メインイベント『私の提言』入賞者20名（子ども10名、大人10名）には、久留米市長賞をはじめ、久留米市教育長賞、久留米市社会福祉協議会会長賞、くるめ商工会議所会頭賞、JAくるめ賞、西日本新聞社賞、久留米大学長賞、ゆにばひろば実行委員会会長賞などが授与された。久留米市長賞の「子どもの部」には荘島小学校6年今里陽菜さんの「家族が作り上げた春」が、「大人の部」には島井新一郎さんの「発酵生ゴミ堆肥活用市民農園」が選ばれ、その他の受賞者とともに「健康生きがいづくり」に対するさまざまな発表が行われた。その成果は久留米大学比較文化研究所『－私の提言集－健康生きがいのあるまちづくり』に収録されている。

『和太鼓ひろば』では12団体の和太鼓の競演、『おどりひろば』では8団体の踊りが披露され、子どもから大人まで会場は祭りの熱気に包まれた。このような形で市民が大学構内や大学施設に足を踏み入れたのは、御井学園開学以来はじめての出来事であり、キャンパスの広さ大きさはばかりでなく、御井アリーナの舞台の広さ大きさや新しさなどに、「素晴らしい」という市民の声があげられていた。

生まれて初めて大学に足を踏み入れた市民にとって、それまで自分達とは無縁であった大学が非常に身近に感じられたそうである。そのためか、自分の孫を久留米大学に入学させたいという祖父母世代の声も聞かれ、普段大学に特別な感情をもつことのない私たちにとっても、大学とはそれほど素晴らしいところかと、自分達の足元を改めて見つめ直すきっかけとなった。また、それほど素晴らしいものであれば、大学を我々教員と学生だけで独占するのではなく、市民との協働の場として開くことも大切なことと改めて気づかされたフェスタであった。

フェスタでお世話になった個人や団体・組織や機関に対して、この場をお借りして厚く御礼申し上げるとともに、本大学の今後の取り組みについても、なお一層のご理解とご協力をお願いし、フェスタの報告に代えることにしたい。

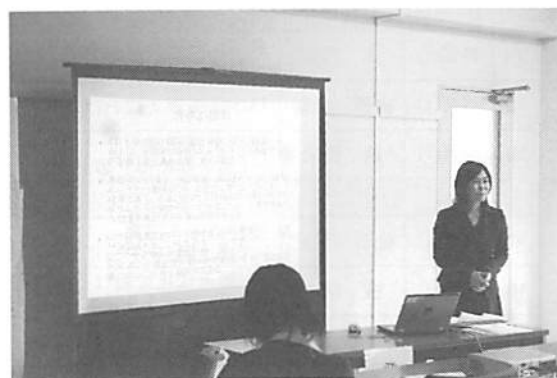
（文責 保坂 恵美子）

4. 比較文化研究所 研究員 発表会

1) はじめに

久留米大学比較文化研究所では、研究員制度を設けており、2007年度現在、30人の研究員が所属している。研究員諸氏は当然ながら各自の研究テーマに沿って研究を進めており、その成果は各自の所属する学会等で発表しているわけであるが、昨年度（2006）から比較文化研究所にも発表の場を設けている。これは、比較文化研究所の研究員として、どのような研究がなされているかを研究所として把握することと、研究員諸氏が研究発表を通じて研究の発展をはかることを目的としたものである。

2007年度は、参加者58名。その内、発表者は21名であった。2006年度（参加者67名：発表者28名）に比べ若干少なくなったが、各会場での質疑応答も活発に行われ、内容のある発表会となった。



2) 発表会の日時及び発表形態

①日 時 平成20年2月21日（水） 10：00～15：30

②会 場 久留米大学 御井学舎 比較文化研究所

（100号館3棟2F：比較文化研究所会議室、ゼミ室）

3) 発表演題一覧

平成19年度 比較文化研究所 研究員研究発表会
演題一覧

第 1 会場：100号館 3 棟 2 F 比較文化研究所 会議室						
NO	役割	発表者	演 題	時 間	専門	指導教官
グループ①	1 時間②	浦川 康弘	『筑後川まるごとリバーパークと筑後川下流域観光』	10:00~10:20	経済	駄田井 正
	2 ベル②	王 彦風	日中大学生の消費生活に関する研究計画	10:20~10:40	経済	駄田井 正
	3 座長②	夏 広軍	技術の問題と持続可能な社会の形成 ー技術の可能性と地域の取組みー	10:40~11:00	経済	駄田井 正
休憩(10分)						
グループ②	4 時間・ベル①	阿古 拉	中国農村地域の医療と社会保障制度	11:10~11:30	経済	大矢野英次
	5 座長①	藤村 一郎	満州事変期における吉野作造の国際政治論 ー蠟山政道との対比をとおしてー	11:30~11:50	政治	張 国興
昼休み						
グループ③	6 時間④	長濱 文与	共同作業認識尺度における妥当性の検討	13:30~13:50	心理	安永 悟
	7 ベル④	羽山 順子	養育行動が、4ヶ月児の睡眠、母親の睡眠と健康に及ぼす影響の検討	13:50~14:10	心理	津田 彰
	8 座長④	向笠 章子	ADHD児の「久留米Summer Treatment Program」の効果の研究(第2報) ー2週間プログラムと3週間プログラムの効果についてー	14:10~14:30	心理	津田 彰
休憩(10分)						
グループ④	9 時間・ベル③	伊藤 桜子	非対面の行動的減量プログラムの職域における長期効果	14:40~15:00	心理	津田 彰
	10 座長③	穴井 千鶴	育児期女性の心理的支援プログラムの効果	15:00~15:20	心理	津田 彰
第 2 会場：100号館 3 棟 2 F ゼミ室						
グループ①	11 時間②	河野 本和	「対山館文庫について」 ー筑後柳河における施設図書館の再考ー	10:00~10:20	政治	堂前 亮平
	12 ベル②	胡 薇	中国の中小企業信用保証制度の持続的発展について	10:20~10:40	法学	宗岡 嗣郎
	13 座長②	古賀 崇雅	李退溪と『二程粹言』をめぐって	10:40~11:00	歴史	野田 俊昭
休憩(10分)						
グループ②	14 時間①	江 秀姿	台湾における日本統治明治期の日本人教員について ー教員講習所及び国語学校師範部を中心にー	11:10~11:30	文学	崎村 弘文
	15 ベル①	占部 匡美	日本語教育史における入門期教科書の基礎語彙研究	11:30~11:50	文学	崎村 弘文
	16 座長①	胡 興栄	夏目漱石研究 ー「道を修める」「志」ー	11:50~12:10	文学	江頭 肇
昼休み						
グループ③	17 時間④	佐田 亜紀	漢詩にみる道真 ー「博士難」を中心にー	13:30~13:50	文学	江頭 肇
	18 ベル④	張 慧珍	日・韓近代化における女性運動の考察 ー1920年代を中心にー	13:50~14:10	文学	江頭 肇
	19 座長④	幣旗佐江子	異類婚姻譚の研究 ー「狐」を中心にー	14:10~14:30	文学	江頭 肇
休憩(10分)						
グループ④	20 時間・ベル③	三浦幸一郎	「玄語」は異次元の哲学である。	14:40~15:00	文学	江頭 肇
	21 座長③	楊 波	日本作家の中国体験 ー明治から昭和へー	15:00~15:20	文学	江頭 肇
ー	22 ー	今村 義臣	数字や文字に色を見る共感覚者(1)	ー	心理	木藤 恒夫
ー	23 ー	岸川 郁子	日本近世の漢詩文研究 ー徂徠派の文学*日本文化としての漢詩文の成立*ー	ー	文学	江頭 肇
ー	24 ー	徳永 武将	真崎基三郎と二・二六事件の関係 ー軍内対立の再検討ー	ー	文学	江頭 肇
ー	25 ー	方 大年	中国、長春市における商業中心地の立地メカニズム	ー	文学	堂前 両平
ー	26 ー	羊 又夫	中国、日本における喫茶の成立と展開	ー	文学	崎村 弘文

*各グループでの座長、時間、ベルは、役割の番号で示している

(文責 行實 鉄平)

5. 日誌 (2007年度)

2007年 (平成19年)

4月11日 (水) 比較文化研究所運営会議

4月25日 (水) 比較文化研究所会議

6月27日 (水) 比較文化研究所運営会議

9月12日 (水) 比較文化研究所運営会議

9月23日 (土) ～24日 (日) 健康と生きがいのあるまちづくりフェスタ

10月31日 (水) 比較文化研究所運営会議

11月14日 (水) 比較文化研究所会議

12月9日 (日) 比較文化研究所開設20周年記念講演会

谷川 健一氏 (日本地名研究所長)

「筑紫平野の物部氏と邪馬台国～大きな壺は大きな平野で生まれる～」

2008年 (平成20年)

1月9日 (水) 比較文化研究所運営会議

2月6日 (水) 比較文化研究所協議会

2月20日 (水) 比較文化研究所研究員研究発表会

3月11日 (水) 比較文化研究所運営会議

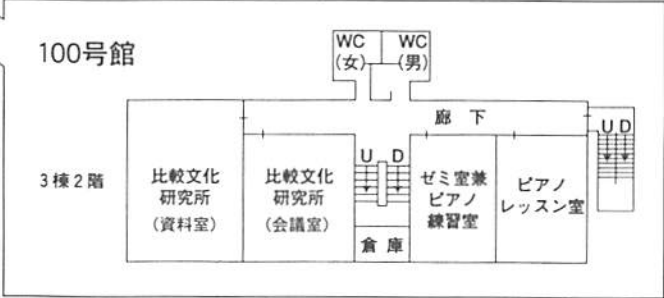
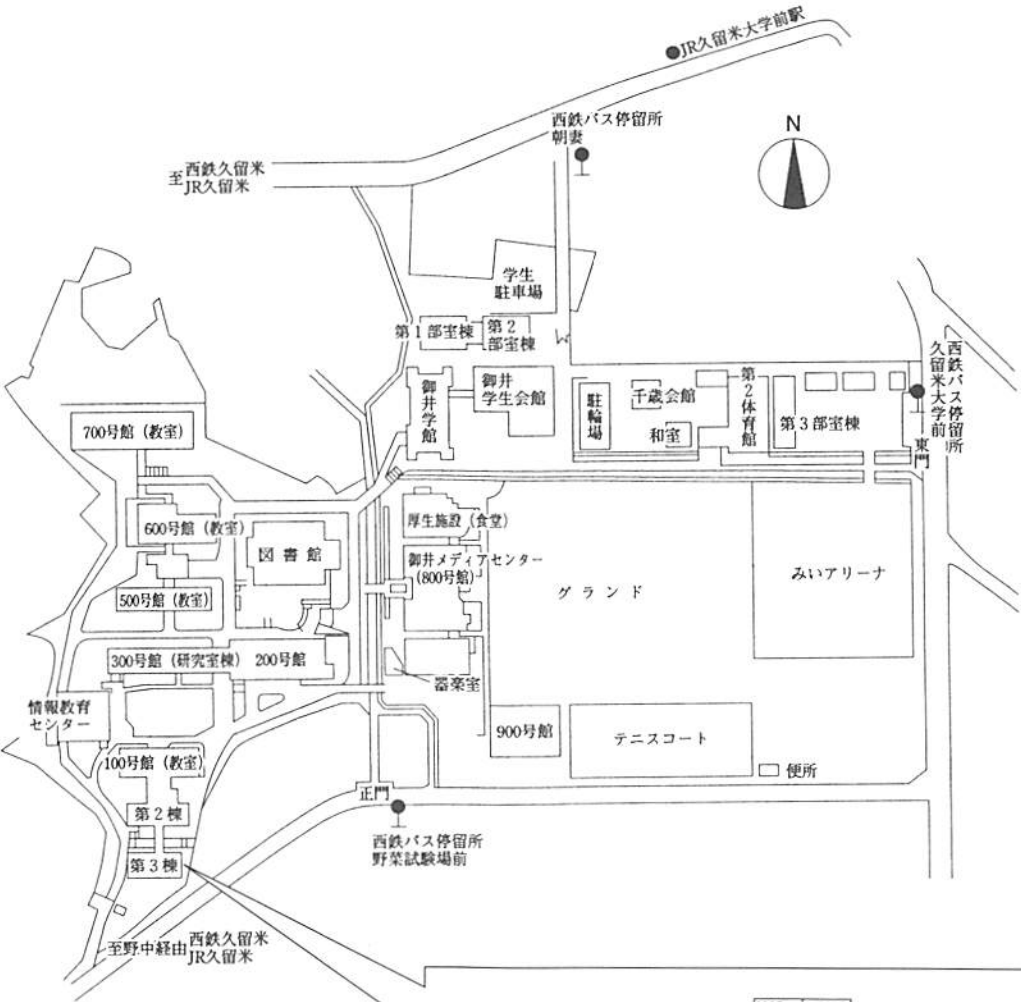
施設・設備

比較文化研究所は、1987年の設立当初は、旭町キャンパスの大学本館3階に設置されたが、大学院比較文化研究科が開設された1989年に、旭町キャンパスから御井キャンパスに移動した。その後数回の移動を経た後、2006年に100号館の現在の位置に移動している。研究所の部屋は2部屋あり、1部屋は会議・研究会に使用、他の1部屋は資料室および作業室として使用している。なお、専任所員の研究室は、300号館にある。

研究所の資料室には、紀元前3世紀に不老不死の薬を求めて渡来したとされる「徐福」に関する膨大な図書が保管されている。これは、元サガテレビ副社長内藤大典氏（故人）が収集された図書である。現在、図書の整理を進めているところであり、この方面の研究の発展に寄与するものと期待される。



久留米大学（御井学舎）比較文化研究所 案内図



久留米大学 比較文化研究所年報 第1号

著作権所有

不	許	複	製
禁	転	載	

平成21年3月10日 印刷 第1号
平成21年3月15日 発行

編集兼 久留米大学比較文化研究所
発行者 〒839-8502 久留米市御井町1635

印刷所 多田印刷株式会社
〒830-0037 久留米市諏訪野町四丁目2432